

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 26, No. 4 神奈川県立生命の星・地球博物館 Dec. 2020



ウミテング(ウミテング科)

Eurypegasus draconis (Linnaeus, 1766)

標本: KPM-NI 58747※

体長: 61.5 mm

産地: 三浦半島, 諸磯

瀬能 宏 (学芸員)

※当館電子台帳上の資料番号はゼロを付加した7桁の数字で表記されます

この写真はウミテング科ウミテング属のウミテングを背面から撮影したものです。甲殻類のようでもあり、昆虫のようでもある生物の正体はれっきとした魚なのです。本種の標準和名は海に住む天狗を意味すると思われ、神奈川県三崎での地方名に由来します。この奇妙な魚は1710年にオランダで出版されたレイシ (F. Ruysch) の博物書でアンボンの飛ぶ小さな魚として紹介され、その図版には八放サンゴの枝に留められた本種の乾燥標本が描かれていました。本種を含むこの仲間の

英名はseamoths、つまり海の蛾^がで、この本の図版からの連想かも知れませんが、実際は海底を這^はうように移動しながら小動物を捕食する底生の魚です。本種の属の学名の語幹に使われている *pegasus* の原義はギリシャ神話に登場する翼を持つ天馬ペガサスです。また、種小名の *draco* はラテン語で竜のことです。本種にまつわる名前には架空の生物が多く登場することから、歴史的にこの魚が不思議で謎に満ちた魚として人々に認識されてきたことを窺^{うかが}い知ることができます。

どうやってここへ？ 展示室の切り取り・型取り・はぎ取り標本

いしはま さ え こ
石浜 佐栄子(学芸員)

当館の常設展示室には、世界中から集められた約1万点もの標本が展示されています。大地（地学）に関する標本だけでも、いん石や岩石、鉱物、化石など多種多様です。いん石や化石はそのまま丸ごと標本にすることが多いので、収集する大きさ（範囲）の目安を比較的判断しやすいのですが、どこまでも広がる大地に対しては「これ、どこまでの範囲を採集すれば良いの…？」と悩んでしまうこともしばしばです。特に展示を作る時には、広大な大地の状況を再現して皆さんに体感してほしいと思うので、どうやって標本化するか色々と作戦を練ります。

大地を、広がりを持って標本化するには3つの方法があります。「切り取り」「型取り」そして「はぎ取り」です。当館の常設展示室には、これらの方法で採集され世界各地からやってきた貴重な標本がいくつもあるのですが、大きすぎて背景と化してしまっているのか、残念ながらあまり皆さんの目に留まっていないように思います。今回は、そんな標本たちの「えっ、そんな場所から、そんなふうにして博物館までやって来たの！？」という故郷や引っ越しの話を紹介したいと思います。

ジブチからまるごと持ってきちゃった！

トラバーチン【切り取り標本】

1階地球展示室、回転する大きな地球儀の向かい側に「トラバーチン」の標本が展示されています（図1a）。熱水が噴き出す場所のできる石灰質の岩石で、地球内部に蓄えられた熱エネルギーが放出されていることを具体的に示す貴重な大地の標本です。

この標本の故郷は、東アフリカのジブチ共和国（図1b）。これを一体どうやって博物館へ持ち込んだのかというと…なんと、大地をまるごと「切り取って」持ってきてしまったのです！運んでいる途中で崩れないよう周囲を樹脂で固定し（図1c）、クレーンで持ち上げ（図1d、e）、梱包してジブチから日本まで運搬し、展示室で組み立てて現地の状況を再現したのです。岩石の小山たちを、まるごと塊のまま移動させてしまったというわけですね。ジブチの大地に立っていた岩石が、当館にそのままのかたちで再現されているのかと思うと、遠いアフリカからはるばるようこそ…と感慨深い気持ちになります。

このように大地の一部を切り取って、ブロック（塊）のまま標本化するのが「切り

取り」技法です。広い範囲を採集しようとなると、とんでもなく重くなるため、採集や運搬には重機が必要です。非常に大掛かりな作業になりますが、大地の一部を実物そのものとして三次元的に保存できる、学術的にも大きな意義のある方法です。化石の入った地層を「切り取って」持ってきて、室内で落ちていて化石を取り出すことなどもしばしば行われます。

カナダの大地を、そのままここに…

枕状溶岩の壁【型取り標本】

カナダのイエローナイフには、枕のようなかたちの溶岩がいくつも積み重なった「枕状溶岩」の大地があります。「枕」はまくらじょうようがん。マグマが水の中で冷え固まった時にできるかたちで、かつてこの大地ができた時（約27億年前）に、ここが海の底だったことを示しています。その後長い年月を経る中で陸上へと露出し、さらに氷河で削られて、現在はなだらかな丘となっています（図2）。

この枕状溶岩の大地の形状や色を忠実に再現し、壁に立てて展示した標本が1階地球展示室にあります（図2a）。溶岩が固まる前にガスが抜けた穴や、枕

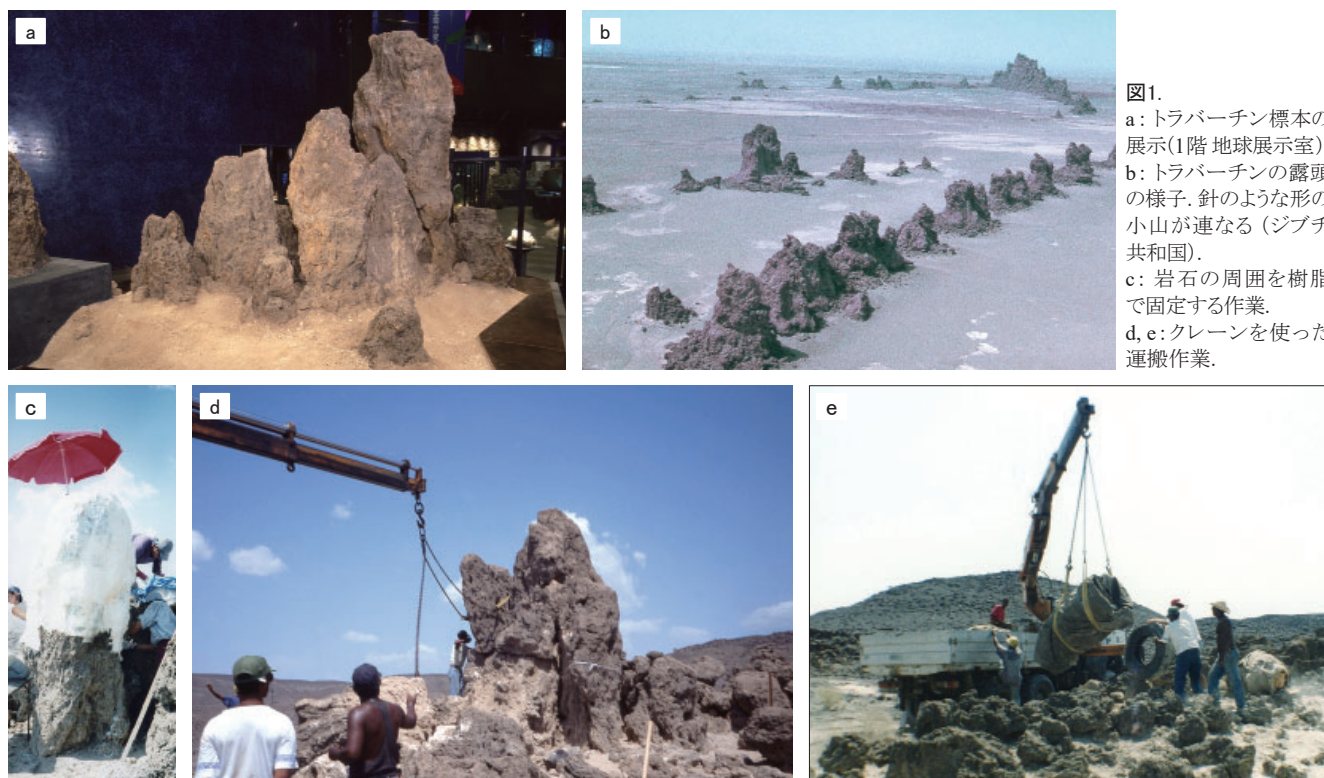


図1.
a: トラバーチン標本の展示(1階地球展示室).
b: トラバーチンの露頭の様子。針のような形の小山が連なる(ジブチ共和国).
c: 岩石の周囲を樹脂で固定する作業.
d, e: クレーンを使った運搬作業.



図2. a: 枕状溶岩の壁面展示 (1階 地球展示室). b: 型取り作業の様子 (カナダ, イエローナイフ). c: ドリルを使った岩石の採取.

が垂れ下がったかたち、氷河に削られてできた地表面のうねり、氷河に含まれていた岩屑が大地をこすった痕（展示物中では横方向に伸びた線）などを、まるで現地で見ているかのように観察することができます。

ここでは「型取り」技法によって大地を保存し、博物館の中に運び入れることを行いました。「型取り」は、カチカチに固まった大地を広い範囲で標本化したい時に使われる技法です（自然科学のとびら 第21巻1号）。大地の表面の「型」を取り（図2b）、それを雄型としてレプリカ（型取り模造）を作るのですが、この標本はただの型取り模造とは一味違います。なんと、型を取ったうえでその部分の岩石をドリルで採集し（図2c）、その岩石片を型に当てはめながら展示を作ったのです。部分的に実物標本を組み込んだ「型取り」と「切り取り」のハイブリッド作品と言えるかもしれません。カナダの大地を、色も形状も厳密に再現したこだわりの展示、注目してみてください。

ただの壁紙ではありません

海の地層と陸の地層【はぎ取り標本】

3階の神奈川展示室、化石や岩石の背後にあるその標本たちに目を留める人はあまりいないかもしれません。ただの壁紙かと見過ごしてしまいそうですが、これら

は「はぎ取り」技法を使って採集された、れっきとした標本です（図3a, b）。

「はぎ取り」技法では、地層が見えている崖に接着剤をつけ、布やガラス繊維などで裏打ちをして、接着剤が固まった後に表面を薄くはがし取ります（図3c, d）。地層が連続的に広がっている状態を、粒の並び方などもそのままに、“実物”の資料として収集・保存することができます（自然科学のとびら 第20巻3号）。立体的で非常に重い「切り取り」標本とは対照的に、厚さはせいぜい数ミリメートル程度

と軽くて持ち運びやすく、収蔵庫では絨毯のようにくるくると巻いて保存できる便利な標本になります。

神奈川展示室には、貝の化石が入った「海の地層」と、箱根火山や富士火山の噴火でできた「陸の地層」、全部で8種の標本を展示しています。流れる水や火山のはたらきでできる地層について学ぶ小学校6年生理科「土地のつくりと変化」の学習にもぴったりです。学校の校外学習として、あるいは親子で一緒に、じっくりと観察してみたいはいかがでしょうか。

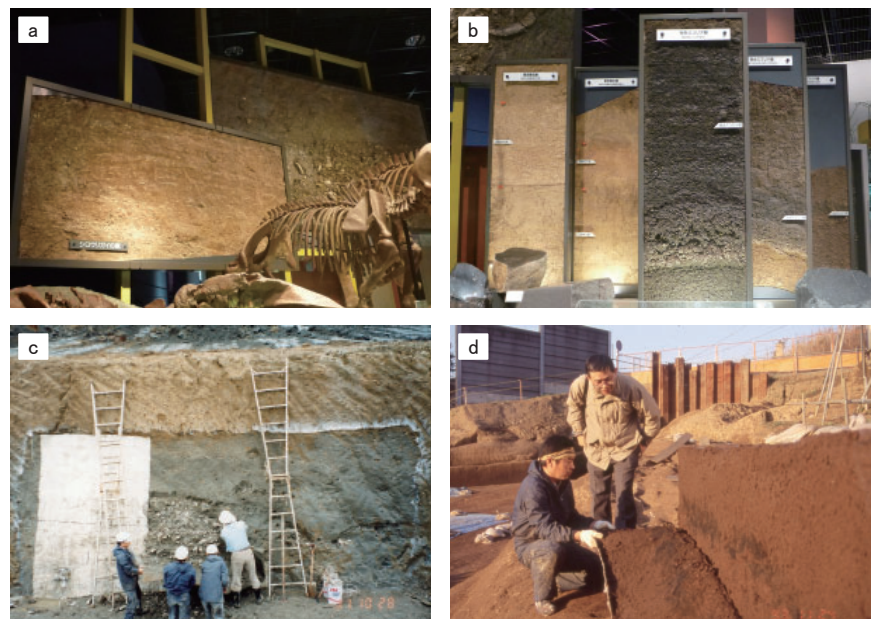


図3. a, b: 地層はぎ取り標本 (3階 神奈川展示室). c: 上倉田層カキ礁 (aの右側の標本) のはぎ取り作業の様子. d: 宝永スコリア層 (bの右端の標本) のはぎ取り作業の様子.

世界最大のカメ、オサガメがやって来た

まつもと りょうこ
松本 涼子(学芸員)



図1. 2020年8月4日、藤沢市湘南海岸公園に漂着したオサガメ。撮影：石井雅之氏。

オサガメ漂着

2020年8月3日早朝、日本セトロロジー研究会の石井雅之氏から、オサガメ *Dermochelys coriacea* の死体が横須賀に漂着したとの知らせが届きました。残念ながらこの日は死体を回収できず、オサガメはそのまま沖に流されました。ところが翌8月4日の夕方、オサガメが浜に戻ってきました(図1)。今度は藤沢市の湘南海岸公園に漂着したとの知らせを受け、8月5日朝、鳥類と哺乳類の学芸員に加勢してもらい現場へと向かいました。現場に到着すると、海水浴客が賑わう浜辺の真ん中に、こんもり砂を被せられた甲長1.3mのオサガメが鎮座していました。標本にするため博物館に持ち帰ろうとしましたが、いくら小ぶりのオサガメでも女性3人では持ち上げることができません。そこで、周囲に気を配り、手元をシートで隠しながら素早くパーツを切り分け、袋詰めして車へと運び込みました。しかし、腐敗が進んでいたため臭いは隠しきれず、周囲の方にはご迷惑

をおかけしました。この腐敗臭は強烈で、この時着用した作業着は2ヶ月経過した後も強烈な臭いを放っています。

標本を作る

腐敗したオサガメを液浸標本にしても軟組織から得られる情報はほとんどありません。そこで今回は、骨格標本を作ることになりました。オサガメの骨格標本作りで苦労するのは甲羅です。多くのウミガメの甲羅は板状の骨が組み合わさり、その上はケラチン質の鱗で覆われています。しかし、オサガメの甲羅は小さな粒状の骨がパズルのピースのように集まり、筋肉や脂肪の層によって繋ぎ止められ、骨の表面は滑らかな皮膚で覆われています。そのため、こうした軟組織を除去すると甲羅が崩壊します。そこで、ホルマリンで固定した後(図2)、甲羅に含まれている水分を「蠟」のようなポリエチレングリコールに置き換えて乾燥標本とする独自の方法を用いました。手足の骨については、左右の判別が困難な部分もある

ので、混ざらないよう部位ごとにネットに入れて、水を張った樽の中に沈めます。樽は野外に置き、軟組織が腐って骨から剥がれ落ちるのを待ちます。今回は2週間程度で骨になりました。しかし、ウミガメの骨の内部には脂が染み込んでいるため、これを除去する必要があります。そこで、今回は炭酸ナトリウムを加えたお湯で数日間骨を煮ました。熱を加えるほど脂が滲み出る一方、骨は脆くなるため、鍋から骨を取り出すタイミングが重要になります。その後、骨の表面に浮き出た脂をブラシで擦って洗い流し、漂白液(過酸化水素水)に浸け、流水で洗って乾燥させます。その間、再び脂が滲み出たら、この脱脂作業を繰り返します。脂が滲み出なくなったら標本を燻蒸し、やっと収蔵庫に納めることができます。骨格をつくり始めて2ヶ月、ようやく乾燥の段階にきました(図3)。

神奈川県海岸に打ち上げられたオサガメのうち、当館で所蔵する標本は今回で4体目となります。

オサガメはどんなカメ?

オサガメはインド洋、太平洋、大西洋、地中海に広く分布するウミガメです。数ある特徴の中で際立つのはその大きさでしょう。現在生息するカメでは世界最大の種として知られており、その甲長は1.8mに達します。彼らは何を食べてこんなに大きくなるのでしょうか。答えはクラゲなどゼラチン質の生物です。クラゲの重さに対して摂取できるエネルギーはほんのわずかであるため、大量にクラゲを食べる必要があります。そこで、オサガメは餌の豊富な寒冷な高緯度海域から、産卵地となる暖かな海まで、季節ごとに回遊します。体の大きな個体ほど長距離移動が可能になり、より高緯度にも向かうことができます。ある研究では、年間18,000 kmの移動が報告されています。つまり地球半周に近い距離を1年間に移動していることになります。時には水温0℃の海域まで辿り着くオサガメの体は、大きな体内でつくり出された代謝熱を体温として保持しやすくなっています。さらに体表面



図2. ホルマリン固定したオサガメの甲羅。



図3. 脱脂を終え、乾燥したオサガメの骨格。



図4. オサガメの口腔から食道、胃にかけて発達する棘 (KPM-NFR 21).
撮影: 中島保寿氏.

を断熱性の高い厚い皮膚(真皮層)で覆うことで、他のウミガメよりも低水温に耐えることができます。骨格からしみ出るほどの豊富な脂も保温効果を高める助けとなっているのでしょう。その一方、産卵のために水温30℃の熱帯域へも移動します。そこでは、海水温の低い水深まで潜り、動きを最小限にします。また、ヒレ状の大きな前肢に血液量を増やし、放熱板のようにしてオーバーヒートを防いでいます。

すべてはクラゲのために！？

オサガメの移動能力は水平方向だけでなく、垂直方向にも発揮されます。彼らには大型の鯨類と同じく深い潜水能力があり、1,000m以上の潜水が可能です。オサガメはなぜ潜水を繰り返すのでしょうか。一説には深層や中層にできた急激に水温が変化する層(躍層)に集まるクラゲを追いかけるためと言われています。オサガメは潜水速度も大きく、体骨格は急速な水圧変化を受けます。オサガメの甲羅がモザイクタイルのような小さな骨の集合体であることや、お腹に板状の甲羅の骨がなく、脂肪や筋肉などの層で構成されているのは、この急激な水圧変化に耐えるためではないかと考えられています。また、食性に関係が深いクチバシにもクラゲ食の特徴が表れています。上顎の先端は鋭利なナイフのようになっており獲物を噛み切ることができます。しかしクラゲの

ような柔らかい獲物にここまで鋭利なクチバシは必要なく、他の用途があるのではないかと考える研究者もいます。最後に口の中を覗き込んでみると、ケラチンでコーティングされた棘が口腔内を覆っています(図4)。この棘は、食道の内壁にも続いており、棘の先端は胃の方向に湾曲しているため、獲物を絡め取り口腔から胃へと押し込む役割があると考えられています。

頭部のピンク斑点と白斑点

季節回遊をするオサガメは、どうやって季節変化を感じ、移動時期を決めるのでしょうか。夏にイギリス沿岸を餌場とするオサガメの研究によると、彼らは日の長さの変化を感じ、昼夜の長さが等しくなる時期(秋分の日)を夏の終わりと判断して移動すると考えられています。では、体のどこで光を感知しているのでしょうか。アノールトカゲやムカシトカゲには、頭頂部に「第三の眼」と呼ばれる孔の下に網膜、角膜、レンズが発達し、放射線量計の役割があることが知られています。カメの頭頂部にはトカゲのような「第三の眼」と呼ばれる孔はありませんが、松果体が発達していることが知られています。この松果体は脳にある内分泌器で、光を感知し生体リズムを調整する役割があります。オサガメの場合、頭頂部の皮膚には「ピンク斑点」

と呼ばれる部分があります。この部分は皮膚の色素が薄く、血流の多い時はピンク色、少ない時には白色に見えます(図5)。この斑点の下は、頭骨も薄くなり、内側は大きく窪んでいます。この窪みの真下に松果体が位置しています。つまり、皮膚の色素と骨の厚みが薄い部分の下に松果体が位置するため、透過した光を感知しやすくなっているようです。この松果体が光の線量計の役割を果たし、移動のタイミングを計っていると考えられています。

今回紹介したのはオサガメの興味深い特徴のほんの一部です。多くの皆さんにオサガメを紹介するため、今回作製した標本を今後展示したいと考えています。

謝辞

オサガメの情報を提供して下さった石井雅之氏に深く感謝致します。

参考文献

- 亀崎直樹(編) 2020. ウミガメの自然誌 産卵と回遊の生物学. 307 pp. 東京大学出版会, 東京.
- Davenport, J. *et al.*, 2014. J Exp Mar Biol Ecol, 461: 1-6.
- Spotila, JR, Tomillo, PS. (eds) 2015. The Leatherback Turtle Biology and Conservation. 219 pp. Johns Hopkins University Press, USA.

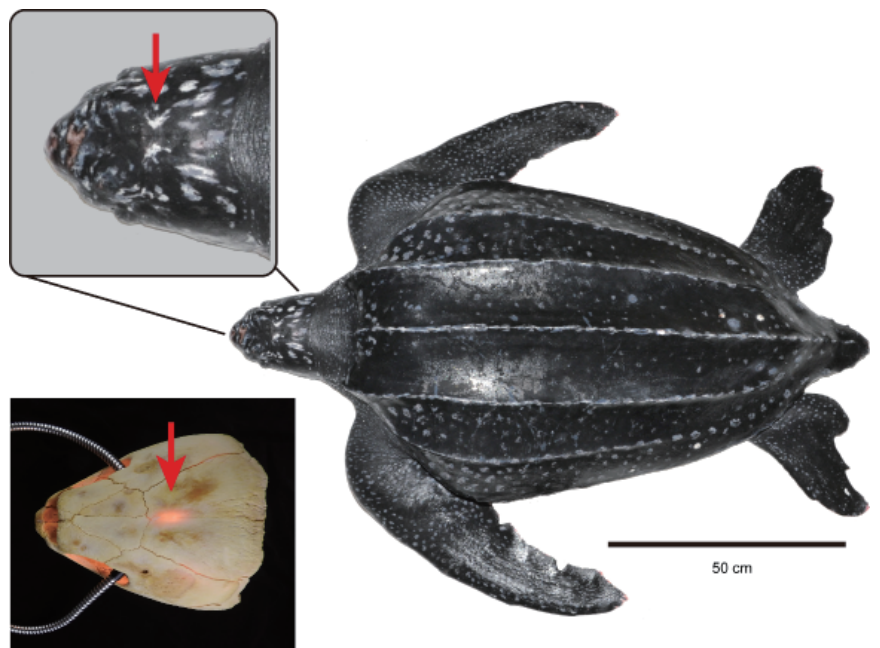


図5. 写真左上: 液浸標本のオサガメ(KPM-NFR 21). 頭頂部の矢印は「白斑点」を示す. 写真左下: オサガメ(今回作製した標本)の頭骨上の矢印は、骨が薄いため光が透過している部分を示す.

先輩学芸員の残したものー30万点の標本と「神奈川県植物誌」の基礎ー

たなか のりひさ
田中 徳久(学芸部長)

2020年10月29日、大場達之氏が^{せいきよ}逝去されました。2019年1月13日に亡くなられた高橋秀男氏と大場氏は、ともに生命の星・地球博物館（以下、当館）の前身である県立博物館に開館前から勤められ、当館の植物標本コレクションの基礎を築き、今に続く神奈川県植物誌調査会による「神奈川県植物誌」調査を計画、主導されてきた方々です。高橋氏は、本稿の著者である田中の前任者で、県立博物館の学芸部長を長く勤め、1994年の退職後、2000年まで当館にも非常勤職員として勤められました。大場氏は、昨年退職された勝山輝男学芸員の前任者で、1998年の退職後、千葉県立中央博物館の副館長に就任されました。

当館の植物標本コレクション

当館の^{いかんそく}維管束植物標本は、33万4千件弱が収蔵資料管理システムに登録され、今も着実にその数を増やし続けています。その概要については登録件数が30万件を超えた際、本誌で報告しています（自然科学のとびら 第23巻1号2-3頁）。そこでも「名実ともに大場氏と高橋氏のお二人が基礎を作ったことが再確認されました」と書きましたが、その段階で収蔵件数をもっとも多いのが大場氏の30,015件、高橋氏は3番目の24,529件でした。



図1. フモトスミレ (KPM-NA0018624)。

大場氏の標本が県立博物館に寄贈された際の「大場コレクション」なる手書きのノートが当館に残されています。それによると、大場氏は、1949年から植物を採集し始めたようで、当初は採集者による標本番号は付しておらず、採集者番号“1”の標本は、静岡県^{あしたかやま}の愛鷹山で1951年7月30日に採集されたフモトスミレで、当館の標本番号はKPM-NA0018624になります（図1）。標本としては、少し寂しく、分布の証拠標本としての意味はあるものの、大場氏の標本を紹介する例として適切か悩みましたが、何はともあれ“1”番の標本として紹介しました。なお、1～74番までは、スミレの仲間^{あしたかやま}に付けられており、当時の大場氏の標本整理のシステムや興味の方向性が気になるところです。大場氏は、その後、1954年からは採集順に番号を付け始め、1954年3月5日に林業試験場で採集した標本が“11703”番となっています。残念ながら、この標本は、当館の収蔵資料管理システムには未登録のようで、いまだ未整理標本の中に埋もれているのかもしれない。

高橋氏の標本については、まとめて寄贈された記録はありません。標本原簿のようなものも見当たらず、採集者番号による管理もしていなかったようです。そこで、高橋氏が採集した標本で古いものを当館の標本収蔵資料管理システムで検索してみました。すると、1921年8月15日や1925年5月5日に採集された標本が出てきました。高橋氏は1935年生まれと聞いていますので、生まれる前に採集された標本の存在

はあり得ません。このような場合によくあるのは、和暦と西暦の混乱です。試しに1925年5月5日に採集された当該標本（KPM-NA0051992）を実際に確認したところ、ラベルには“5.May 25”とあり、年は“25”とのみ書かれていたのです。データ入力時にこの“25”年を西暦“1925”年と覚えてしまったもので、この場合、“25”年は昭和“25”年であり、正しくは“1950”年にすべきだったと考えられます。比較的よくある間違いで、皆さんも、博物館へ標本を寄贈する際や標本の整理作業をお手伝いいただく際に、ちょっと思い出していただければ、幸いです。

高橋氏と大場氏の採集した標本を紹介する予定が、思いもかけず博物館の標本のラベルやデータ入力の課題に関する話題になってしまいました。期せずしてこのような標本を見出すに至ったことは、標本管理、データベース構築における心構えを大先輩の二人に思い出させていただいたような気がします。

なお、当館に収蔵されている高橋氏と大場氏が採集した標本には、採集年代に大きく違いがあることも知られています（田中、2017；図2）。大場氏が採集した標本は、1950年代前半と1960年代前半に採集されたものが多く、これらは「大場コレクション」に記載のある神奈川県立博物館に寄贈されたものです。高橋氏の採集標本には、1980年代の神奈川県のもものが多く、これは後述の「神奈川県植物誌」調査が精力的に行われた時期と一致しています。

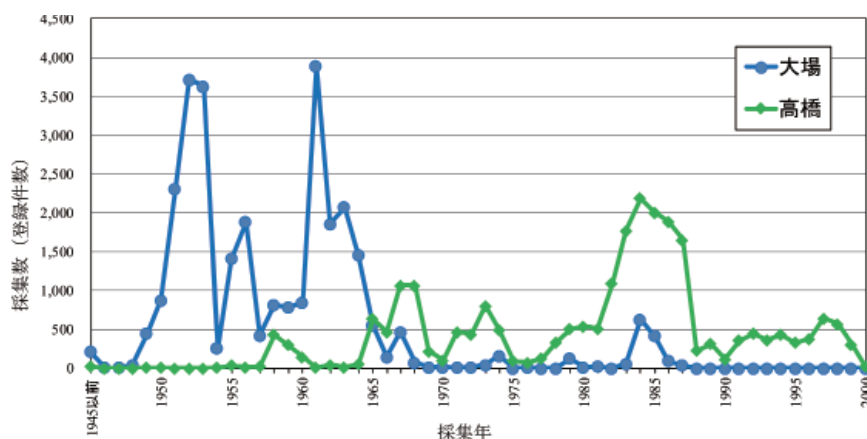


図2. 高橋氏と大場氏が採集した、当館所蔵の標本の採集数の年代別推移（高橋氏の当館退職の2000年まで）。田中（2017）に用いたデータよりグラフ化。



図3. アカイシキバナノコマノツメのタイプ標本。
(KPM-NA0023867)

「神奈川県植物誌」調査のはじまり

「神奈川県植物誌」調査は、高橋氏、大場氏の発起、企図により、神奈川県植物誌調査会が1979年に会の設立総会を開催し、始動しました。城川（1989）ほかによると、「神奈川県植物誌」調査は、日本最初の植物愛好会である横浜植物会の役員の間での1958年版『神奈川県植物誌』改訂の話題が、高橋氏、大場氏の耳に入り、「神奈川きのこの会」が県民の注目を集めていたこともあり、広く県民に協力を求めて精度の高い分布図を作成するというアイデアとともに具現化したものです。中でも、当時高価であったパーソナルコンピューターで分布図や版下を作成する方式、後の国土基本メッシュの導入は大場氏のアイデアです。この調査は、その後も継続され、その成果として『神奈川県植物誌2018』が刊行されました。また、県内標本庫に40万点弱の神奈川県産の植物標本が集積されています。そして、200名超の神奈川県植物誌調査会の会員が神奈川県の植物相を見つめ続け、その情報は地域の自然誌研究の拠点である県内各地の博物館へと提供されてきています。高橋氏と大場氏が敷いた線路は、「神奈川県植物誌」という成果だけでなく、その証拠としての標本の蓄積、調査を継続する組織と人の育成、そして博物館がそれらの収蔵、活動の拠点となる今に私たちを導いてくれました。お二人が目指した目標に向かい、今どこまで到達しているかを伺う



図4. シマコゴメツギのタイプ標本。
(KPM-NA0077089)

ことはもう叶いませんが、後に続くものとして、二人の志に思いを致し、進み続けたいと思います。

自然誌学術界に残した業績

ここまでは、当館の植物標本や神奈川県産の植物相調査に対する高橋氏、大場氏の関わりを紹介してきました。しかし、お二人の活躍とその足跡はそれだけに留まりません。

高橋氏は、県立博物館に着任される前から進めていた高山植物の研究や、島嶼の植物の分類学的な研究に多くの業績があります。当館にタイプ標本が所蔵されているものでは、^{あこうざん} 亜高山、高山生の黄色い花のスマレ群の地理的変異と分布に着目、整理した際に記載したエゾタカネスミレやヤツガタケクスミレ、アカイシキバナノコマノツメ（図3）アカイシリンドウ、コケコゴメグサなどの高山植物、ミクラトンボソウやシマコゴメツギ（図4）などを新分類群として記載しています。また、先に触れた日本最古の植物愛好会である横浜植物会の会長を長く勤め、植物知識の普及と後進の指導に力を尽くされました。

大場氏は、千葉県へ転出された後、神奈川県植物誌の経験を昇華、発展させ、2003年版の『千葉県植物誌』を製作、刊行し、『海草図鑑』（2007）のスクヤノグラフィによる図版はその集大成とも言えるものでした。また、氏の本来の専門は、植物社会学で、むしろそちらの業績

には枚挙に暇がなく、海外の学術誌はもとより、県立博物館の研究報告にも多くの論文や報文を発表しています。記載した新群集だけでも150個を超え、氏単独の記載でも100個近くがあり、研究の対象は、北はサハリンや北海道、南は奄美諸島や小笠原諸島、マリアナ諸島、上は高山帯や亜高山帯、下は海岸の波打ち際までの多岐^{たき}に及びます。特に日本の高山植生の研究ではその第一人者で、コマクサ・タカネスミレ群集やクモマミミナグサ・コバノツメクサ群集を記載した高山の荒原や超塩基性岩地の植生研究はその初期のものです。図5に大場氏が記載したコマクサ・タカネスミレ群集と同定される植分の概観を示しました。

我々学芸員の大先輩である高橋氏と大場氏の博物館に残したものを紹介しましたが、お二人が常に心に留めていた博物館の重要な機能である後世に“残す”仕事を、今後も引き継ぎ、より発展させていきたいと思います。

本記事をまとめるにあたり当館の石田祐子学芸員に貴重なご意見をいただきました。ありがとうございます。

参考文献

- 城川四郎, 1989. 「神奈川県植物誌1988」刊行の経緯. *Flora Kanagawa*, (25): 204-209.
田中徳久, 2017. 神奈川県立生命の星・地球博物館の維管束植物標本の採集年と採集者. *博物館研究*, 52 (8): 24-27.

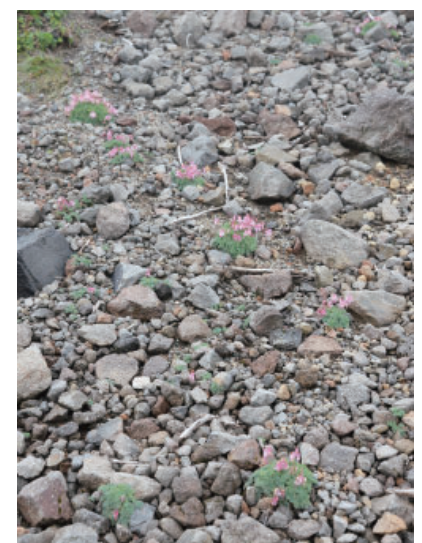


図5. コマクサ・タカネスミレ群集（乗鞍岳）。

催し物のご案内

2020年度 企画展「かながわ発 きこの新種展」



開催期間／2021年2月20日(土)～5月9日(日)
開館時間／9:00～16:30(入館は16:00まで)
観覧料金／無料(常設展は別料金)

写真: ヌメリイロガワリ *Boletus viscidipellis* Har. Takah.
当館近くの森から採集された標本に基づき、新種記載されたきのこ。

きのこをはじめとする菌類には、身近なところにも「未知種」がまだたくさん存在します。博物館にたくさん収蔵されている、このような名無しの菌類標本の中には、その後研究されることで、新種と判明するものもあります。

本企画展では、神奈川県産のものを中心に、近年新種として発表されたきのこの貴重な標本をまとめて展示します。さらに、きのこ標本を集め、新種の発表に至るまでの知られざる博物館活動の裏側もお見せします！

催し物の詳細についてはウェブサイトをご覧ください。
問合せ先：企画情報部 企画普及課

生命の星



ライブラリー通信 文人たちの博物誌⑧ 吉行 淳之介の巻 淳之介はオカピを見たか？

つちや さだお
土屋 定夫 (司書)

ポト、ラーテル、ビクーナ、クロシロコロブス、セーブルアンテロープ、セイラン……。さて、これらは何でしょうか？ すぐにわかった人は相当な動物好きということになります。吉行淳之介の動物エッセイ『珍獣戯話』の目次に並んでいる動物たちの名前です。一般的によく知られているナマケモノやジュゴン、ジャイアントパンダなども含め、51種類の「珍獣」たちが列挙されています。

著者の吉行は芥川賞受賞作家で、文壇に登場したころは遠藤周作や安岡章太郎等と共に「第三の新人」と呼ばれていました。多くの小説やユーモアのある随筆などを残しています。本書の中で吉行は「動物の生態や体形に私は強い興味をもっている」と記している通り、珍獣たちの行動について、独自の視点から観察し、ユーモアたっぷりの文章に仕立てています。

毎日新聞の「日曜くらぶ」に昭和56年9月から1年間連載されたものですが、いくつかの決まりを設けていたそうです。それは哺乳類に限らず、「鳥獣虫魚」のすべてから選ぶこと、また、今、日本の動物園で観ることのできるものに限るというものでした。

この決め事は読者に伝えてあったわけではなかったため、「珍獣といえば、オカピはどうした。もう、とつくに登場してもいいのに」という声もあったようです。

さて、今何かに気付きましたか？ そう、実は当時の日本の動物園にはオカピはいなかったのです。ですから、吉行はオカピを取り上げたくても、書くことができなかったという訳なのです。日本では1999年のよこはま動物園ズーラシアでの公開まで待たなければならませんでした。

そんな吉行は残念ながらオカピに逢うことなく、1994年に亡くなりました。吉行の珍獣への想いと共に、動物園の歴史も散策してみませんか？



毎日新聞社 1982年

＜ 事前申し込みの講座 ＞

講座の内容・対象・申し込み方法等は、博物館ウェブサイトまたは催物案内をご覧ください。

●「ほねほねパズルで学ぶ
動物の骨のかたちとくらし」[博物館]
日時／2月6日(土) 10:00～12:00
対象／小学生～中学生と
その保護者 20人
※小学生は保護者参加必須
申込締切／1月26日(火)

●「早春の地形地質観察会」[県北部]
日時／2月6日(土) 10:00～15:00
※雨天中止
対象／中学生～成人 30人
申込締切／1月26日(火)

●「博物館ボランティア入門講座」[博物館]
日時／1月24日(日)～2月11日(木)
全体講義:1月24日(日) 10:00～15:30
分野別実習:期間中の1～2日
募集分野／植物、植物デジタル資料、菌類、哺乳類、魚類、無脊椎動物(貝・カニ)、古生物①(貝化石・古脊椎動物)、古生物②(脊椎動物化石・植物化石・微化石)、展示解説の9分野
定員／分野により2～8名程度
対象／中学生以上
※分野によっては、実習が平日に行なわれることがありますので、ご注意ください。
申込締切／1月5日(火)

募集中の講座については、新型コロナウイルス感染症の拡大状況により中止となることがありますので、あらかじめご承知おきください。最新情報は、当館 公式ウェブサイトをご確認ください。よろしくお願いいたします。

当館では新型コロナウイルス感染症の拡大を防止し、来館者の皆さまの安全確保に努めるため、感染症拡大予防対策を実施しています。各種の制限により、ご不便をお掛けすることになりますが、何卒、ご理解とご協力をお願いいたします。

[公式ウェブサイト]
<http://nh.kanagawa-museum.jp/>

[公式Twitter]
@seimeinohoshiPR



自然科学のとびら
第26巻4号(通巻101号)
2020年12月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 平田大二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
編集 本杉 弥生(企画普及課)
印刷 株式会社あしがら印刷

© 2020 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.